
えんじえるず聖夜

国沢裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えんじえるず聖夜

【Nコード】

N9589C

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

私は、両親の海外転勤に伴い、高校を転校して、日本で一人暮らしをすることになった。日本に残った理由は、私の持つ不思議なロザリオの秘密を探る為。そして、新しく転入した高校のクラスで、私と同じロザリオを持ち、怪しげな相談事をする三人組に出会う。彼らの目的はなんだろう？それに、私のロザリオの秘密、わかるかな？SF小説シリーズ1作目となる「出会い編」。

えんじえるず聖夜・1 (前書き)

この小説では、チャプター後に書かれている人物による、一人称交代方式をとっています。

えんじえるず聖夜・1

チャプター・1 ほーりゅう

扉を開けると、窓が閉まったままの部屋は真っ暗だった。夜の十時。初めて入る部屋だったので、後ろ手に扉が閉まってしまえば電気のスイッチの位置がわからない。

扉を再び開けることをせず、ボストンバッグをぶら下げたまま私、ほーりゅうはしばらくその場に立ち尽くす。

私の両親はどちらも医師であり、数年海外に行くことになった。当然十六歳である私もついてくるものと思っていたらしいが、私は日本に残りたいと言った。両親は、はじめ認めなかったが、叔母である母親の妹が保護者となって預かると説得し、高校を転校する事にはなったが、叔母の元で日本に残ることになった。

先程まで叔母の所で夕食をとりながら今後の話を決め、その後、これから自分の家となるところに来た。独身の叔母と同居も考えたが、叔母の住むマンションに空きがあったことと、こちらも外科医師である叔母の不規則な生活に加え、思春期に対してお互いにプライベートを持たせてくれるという叔母の計らいである。また、別に暮らしつつも衣食住にかかる資金を全て持つてくれるという話の分かる叔母であるが、その代わりにいろいろと責任を自覚せざるを得ない。

極力減らしたが、恐らく荷物は運び込まれたままダンボール状態で山積みされているはず。まずは一人で生活する第一歩、今夜中に生活が出来る環境にしておきたい。

暗闇に目が慣れてきた頃ようやく、玄関先にボストンバッグを置

き、靴を脱いだ。暗闇の中をまっすぐ窓に向かってゆっくり歩き、二階の部屋なので、夜の窓には特に気をつけなさいと言われたが、とりあえず部屋の空気を入れ替えたい。カーテンを開け、静けさの中に大きい音がたたないように、ゆっくり窓を開けた。

静かに新鮮な風が入って、私のロングストレートだが軽い髪を揺らした。静かな住宅街なので、入る空気は汚れておらず悪くない。眼下には電信柱につけられた明かりで裏道がみえる。この時間では人も通らない。

そう思った時、道のはずれの暗がりの部分で人の気配を感じた。一瞬身体をひきかけたが、まだ部屋の電気をつけていないことを思い出し、逆に動かない方が注意をひかないかもと固まる。その間に人の気配は足音も無く移動し、電信柱の明かりのそばまで来て止まった。

なんとなくカーテンににじり寄って眺める。

(身長はそう高くない。男の子。雰囲気は真面目そうな中学生って感じ、年下か。手ぶらだから塾帰りってわけじゃないのかな。遠目に見た限り顔は結構整ってる。髪はそんなに長くないが詳しく観察するには明かりが足りない。黒っぽい上着に暗めのジーンズ……)

そこまで考えた時、明かりの下で少年が上着を脱いだ。裏返して羽織りなおす。

(なるほど、夜だから安全の為に目立つ明るめの色に変えたのか) その一瞬、少年の首にかけている鎖とペンダントトップが、明かりに反射して光った。

「！」

私は驚いた。そしていつも離さずかけている自分のペンダントを思わず握り締める。一瞬だったが、自分と同じペンダントに見えた。少年は私に気づいた様子もなく、また足音をたてずに暗がり消えていった。

私は動かなかった。言葉が通じないという理由で両親について行かなかった訳だけではない。このペンダント、真ん中に緑の石が入ったロザリオ。物心がついた時には既に首にかかっついていて、私の危険な時には何度も助けてくれた。ロザリオを見るたびに、日本から離れてはいけないという声が聞こえていた。両親に聞いてもあいまいだった、その理由が分かるまで調べてみようと思った矢先の何たる偶然！

私は心が湧きだった。

えんじえるず聖夜・2

チャプター・2 ジプシー

九月半ばの日差しが気持ちの良い朝。登校中の生徒達を眺めつつ、俺、えぬまさとし江沼聡はかなり早い時間から、まだ生徒の少ない教室の窓際で日にあたっていた。

高校一年生。真つ黒の髪と瞳。そう高くない身長と細身で、ひ弱な感じがしないでもない。顔立ちはまだ幼くみえるが、整った顔に黒ぶちメガネの、成績は優秀なクラスの委員長である。顔だけで言えばクラスの女子に人気が出そうだが、微妙に近寄りがたいのは、俺の父親が陰陽師だといわれているからだ。

陰陽師。昨今では漫画や映画で取り上げられるせいか、意外と興味がある若者が多いが、だからといって実際に友人になりたいわけではないらしい。

俺の父親は本当に陰陽師ではある。ただ直系ではなく末端の末端で、陰陽師の仕事を主にしていたわけではなかった。俺自身それなりに父親から受け継いでいたが、引き継ぎきる前に両親共に亡くなっている。

噂としてクラスの皆にどう伝わっているかは気にしない。ただ、陰陽師の仕事や身体の弱さを理由に学校を休めるので、便利に使っている。仕事という理由をつけて長期間休むことがある為に、俺がさすらっているイメージがあるのか、クラスの友人達は俺を「ジプシー」と呼んでいるのも言うに放っている。

教室の入り口で、副委員長をしているたえきゆめの佐伯夢乃が姿をみせた。俺の姿をみつけると、つかつかとやって来る。成績は良くてもぼんやり者と思われている委員長に比べ、こちらは絵に描いたような才色

兼備の優等生。肩口で切りそろえられた、真っ直ぐな漆黒の黒髪に切れ長の目。高校生には無い落ち着きまであるようだ。

そばまで来た夢乃は、人差し指を俺の胸元に突きつけて言った。

「委員長。あなた、今日の朝一番に職員室に行くように、昨日先生に言われていたでしょう？」

「あ、うっかり忘れてた」

「あなた、その為に朝早く来たんじゃないの？」

そう、その為に早めに登校した。だが鞆を置き、窓の外に目を向けたら、いい天気だったのだ。ついぼんやりと眺めてしまった。

「やっぱり……。もういいわ。そうだと思って、もう職員室に行つて来たから」

そう言った夢乃の後ろに、一人の女生徒がみえた。が、この高校指定の黒い制服ではない。青いセーラーに赤のライン。胸元のリボンも同色の赤。光に当たっているせいか、紫がかつた色に見えるストリートロングヘア、顔のパーツでは最初に目をひくであろう大きな瞳。その目が驚きの為か、さらに大きく見開かれて俺を見つめていた。

(……………会った記憶はないんだが?)

えんじえるず聖夜・3

チャプター・3 ジプシー

「彼女は転入生の宝龍紫織ほつりゆうしおさん」

夢乃が紹介してくれた。

「ホームルームや一時間目の授業が始まる前に、もう案内を出来るならしておいてって担任に言われたのよ。で、こちらは、あなたを職員室まで迎えに行くのをすっかり忘れた、このクラスの委員長の江沼聡君」

「……また過ぎたことを」

俺達の会話を聞いている間、転入生は俺の顔を見つめていた。最初、驚いたような顔をしていた。だが最後の方では、ギラつく程の威力はなかったが、挑むような眼光に変わっている。

続けて話している夢乃の言葉を聞きながら、すばやく俺は頭の中でもう一度、この顔・ほつりゆう・十五・六歳……などのキーワードをチェックした。しかし、やはり俺の中で思い当たる人物はいない。

夢乃の話がちょうど区切りのよいところになったので言った。

「夢乃、今から校内で案内できるところはするんだろ？」

「そうね、時間もまだまだあるし。そうそう、あなたの席は私の隣でいいかしら？ 机を教室まで運んできているのよ」

「ええ、お願いします」

そう言っつて宝龍の視線が外れ、運ばれてきていた机の方へ向かった。そのタイミングを見て、俺はつつむきながら夢乃の首筋に口元を寄せて囁いた。

「調べる」

一瞬夢乃は目だけで俺を見て、小さくうなずく。そして宝龍の後

を追って机の方に歩いて行った。

彼女達の後姿を目で追いつつになつたが、頭を軽く振つて視線をそらす。多分彼女を見る俺の目は、先程の彼女がした挑むような眼差しになつてしまはずだからだ。

えんじえるず聖夜・4

チャプター・4 ほーりゅう

(間違いない。昨日は暗くて遠目だったけれど、今日は昨日と違ってメガネをかけていたけれど。彼だ。てっきり年下の中学生だと思っていたのに。まさか同じ高校の同じクラスの委員長だとは)

昨日に引き続き偶然で、授業が始まって私、そのことばかりが頭によぎる。特に手がかりも無く初めての土地で、果たしてどう一人の人間を探せば良いのかと、昨日は夜遅くまで引越しのダンボールをあけながら考えていたのに。

尋ねたい事は、ただひとつ。紫織自身も知らないロザリオの出所。委員長の彼が本当に同じものを持っているのであれば、単刀直入に聞いてみようか。それともしばらく様子を見てみようか……。

授業内容は、若干前にいた高校の方が進んでいたようだ。しかし、同じ内容でもレベルは今の方が少々高い。前の、上流階級の家庭の生徒が多かった高校では、私はそれなりの成績で、品行方正を装っていたおかげで先生の受けも良かった。今回の編入試験もどうにかクリアしたが、授業に身が入らないと、ここではかなりきわどい成績になりそうだ。だが、はやる気持ちで、内容が頭に入っていない。

その時、教室の後ろのドアの開く音がした。はっと振り返ると、一人の男子生徒がゆっくり入ってくる。すらっとした長身。染めたのだろうか綺麗な茶色い髪、こちらは色素が薄いのか透き通った茶色の瞳。その瞳が私の上で一瞬止まった。だが、興味が無いかのように、すぐに視線を外し、そのまま無言で席に着く。

「……遅刻をしても、お咎めなし?」

思わず、隣の席の夢乃にささやいた。夢乃はちょっと後ろの様子を伺い、先生の動向を確認しながら、小さい声で答えた。

「彼は城之内京一郎じょうのうちのきやういちろうって言うの。授業に出てきたらいい方ね。先生も、静かに授業が出来るなら、彼に対しては何も言わないわ」

私は、こっそり振り返って様子を見てみる。確かに大人しく席についているが、既に眠たそうに窓の方を眺めながら、顎に片肘を付けている。

「あなたも彼には近づかない方がいいわね」

そう続けて聞こえたので、私は夢乃を見た。ちよっと困ったような顔をして夢乃は言った。

「彼、お父様が極道の組長をしているそうだし、彼自身も暴走族のリーダーらしいわよ」

私はびっくりした顔をして、固まった。

(あまり、この高校やクラスの悪い印象を与えない方がいいかしら) 私の顔を見て、副委員長らしく夢乃はそう考えたのだろう。それきり彼女は私語を慎んだ。

えんじえるず聖夜・5

チャプター・5 ジプシー

昼休みの始まりを告げるチャイムが鳴ると、すぐに校内は喧騒に包まれた。ゆつくりと教科書を鞆になおし、俺は教室を出る。

九月の日差しは、朝と違ってまだまだ夏の暑さを残している。だが、人目を避けて密談をするなら、やはり屋上が良いだろう。そう考えながら階段をあがって行く。

屋上への扉を開くと、そこにはもう二人の先客が来ていた。

「お疲れ」

俺は京一郎に声をかける。京一郎は牛乳の紙パックにストローをさしながら、目でうなずいた。

「徹夜だったんでしょう？ ごめんなさいね。昨日急に頼んじやつたから」

「……マジですげえ眠い。でもまあ、頼まれた情報と資料は持って来ねえとな」

夢乃の言葉に答えて、京一郎は鞆からA4サイズの茶封筒を取り出す。中からスナップ写真一枚と、十数枚の紙を引っ張り出しながら言った。

「親父の端末をメインに拾えるだけ拾ってきた。しかし、お嬢様学校に通う女の写真ひとつ手に入れるのも、最近は個人情報保護つてヤツ？ 大変だよな。知り合いに当たってもなかなかつながるルートがなくてさあ」

「それでも手に入れられる京一郎に拍手」

そう言っただ俺は、写真を受け取る。どれどれ、小さい頃から世間より隔離されたお嬢様学校に通う十四歳。まだ清純そうな笑顔で写っている彼女は、このままエスカレーター式に大学まで通い、清純

なままで成人していくのだろうか。

なんて考えながら写真を眺めていると、京一郎が言った。

「お前がこの話を聞いたの、昨日学校から帰ってからだろ？ もうちよつと突っ込んで聞いていた方が良かったんじゃないの？」

「どう言う事？」

俺の代わりに夢乃が京一郎に聞いた。確かに、昨日は話の大筋と最終目的の確認しかしていない。

「その写真の女、足立真美あだちまみって、ウチの生徒会長の妹じゃねえ？」

そう言っつて、京一郎は一枚の紙を手渡してきた。確かに、住所や家族構成などの項目にざつと目を通すと、記憶にある生徒会長のデータと一致する。だが。

「かまわない。俺と彼女はまだ面識が無い。生徒会長と彼女とで、三人同時に居合わせなければ大丈夫だろう」

ふーんという感じで、京一郎は残りの紙の内容を確認し、俺に一枚ずつ手渡しながら言う。

「ならいいがな。今日の夜は目的の家に、来客予定みたいだな」

手渡された紙を一枚ずつ確認しながら、風がないのを良いことに床に広げて並べていく。よく調べたものだ。ある暴力団の組織図、その結構な人数の顔写真と名前と肩書き、上層部それぞれのスケジュール、その他連中の普段の行動とその範囲、溜まり場、暴力団組長の家の見取り図、そのセキュリティシステム、その周囲の地図……。

俺は、それら全てを頭に叩き込みながら夢乃に言った。

「で、転入生、何者だった？」

えんじえるず聖夜・6

チャプター・6 ジプシー

ちよつと場所をはずれて日陰に座った夢乃は、自分のお弁当を広げながら言った。

「先生に聞いた話や、直接彼女に聞いた話をまとめても、彼女に怪しい所はないと思う。普通のお嬢さんね。お医者様である御両親が海外に行かれて彼女は日本に残り、叔母様のいらっしゃるマンションで一人暮らしをはじめるといよ。それで、そのマンションのあるここの土地の学校へ編入になつたみたいね」

「なにか俺と彼女に、接点があつたか？」

「それまでの引越しはないし。旅行以外で特に生まれた土地から出ていないみたいだし。念の為に問い合わせたけれど、彼女自身に事件暦は無かつたわ。多分接点はない」

夢乃は父親が警視庁内の御偉方な為、コネを使えば、ある程度の情報の融通がきく。ついでに言えば、今回の計画が回ってきたのも、夢乃の親父さんからなんだが。

「へえー。親の監視が無いとは羨ましいねえ」

「京一郎、あなたも親の監視が無いのと同じようなものでしょう？」
京一郎と夢乃の会話は聞き流しつつ資料を目で追い、それならあの朝の視線をどう解釈すべきか、考えすぎで意味などないのだからかと思つた。

一息入れる為に澄み切つた青空を見上げた。この天気なら今夜は星が見える。

とりあえず転入生の事は後回しだ。今新しく入つた情報を整理しつつ、計画の調整を頭の中でする。

（今夜、連中の所に来客がある。誰で、何の用事かはわからない。

暴力団組長の家に入入りするとなれば当然裏社会の人物だろう。となると、わざと客に俺の顔を見せた方が都合がいいか……。客のいるコアタイムを想定すると……)

俺は広げていた資料を集めて揃えなおし、京一郎に手渡ししながら言った。

「今日、委員会があつてさ、終わるのは五時過ぎかな」

「じゃあ、俺がいつもの所で待つてるわ。お前、着替えに帰る時間がねえだろ」

「悪い。頼む」

「何処に出かけるの？」

突然割り込んだ声に、全員が一瞬沈黙した。

「宝龍さん、あなたいつから……?」

屋上から階段へ続く扉から顔を出した宝龍は、夢乃にお弁当箱を持ち上げてみせた。

「私もここで一緒にお弁当食べていいかな? それと私、前の学校

では、ほーりゆうって呼ばれていたんだ。こっちでもそう呼んでよ」

そう言いながら近寄って来た。京一郎がむっとした表情をする。

「クラスにいる他の連中と一緒に食べばいいだろ」

「私、転入してきたばかりで、まだ話の弾む友達がないのよ。

朝から一緒にいてくれた夢乃と食べたいんだけどな」

ほーりゆうは、京一郎に臆した様子も無く言つてのける。そして

俺の方を向いて手をあげると、いきなり俺の顔から眼鏡を奪い取った。

えんじえるず聖夜・7

チャプター・7 ジプシー

「！」

ほーりゆうは、俺の眼鏡をかざしながら、遠くのビル街を眺めた。「朝に見た時から気になっていたのよ。やっぱりね〜！ この眼鏡、度が入っていないじゃない。何で伊達なんかかけているのよ」

俺は、無言でほーりゆうの手から眼鏡を取り上げると掛けなおした。変な女。初対面の人間に対して最初に目が行く所はそこか？ ……こいつの朝の視線は、これを見ていただけなのか？

「あんたが他に行かないなら、俺がどっかに行くさ」

かなり不満げな顔で鞆の中に封筒を入れると、京一郎は一人でさつさと階段に向かって歩き出した。

「やったなあ。京一郎ったら、照れちゃって！」

ほーりゆうの、あまりにも大胆不敵な言葉に、ちよつと啞然とする俺と夢乃。

京一郎もさすがに振り返り、何かを言おうとしたが、どうにか耐えたようだ。踵を返して無言のまま扉の向こうへ消えていった。

その後姿を見ていたほーりゆうが、急に俺の方へ振り返って言った。

「そうそう、今、あんた達の気が付かなかった事を教えてあげる。どお？ 私を仲間にしない？」

「……何の事かしら？」

夢乃が警戒しながら聞いた。ほーりゆうは勢い込んだ感じで、しかし勿体ぶって言った。

「あんた達がここで何か相談事、していたでしょ？ 私が来る前に

ドアの影で立ち聞きして、様子を伺っていた人がいたわよ。私を見たらどこか行っちゃったけど。見たことのない男子生徒だったから、うちのクラスの人じゃないな」

「あなた、それって……」

言いかけた夢乃の前に、俺は片手を出して制した。

「ジプシー！」

遠慮なく俺は、裏の世界で場数を踏んで来た者だけが出せる威圧的な眼光を湛えて、ほーりゅうを見据えた。

「ご忠告ありがとうございます。しかしながら、これ以上俺達にかかわらない方が賢明だね。ろくでもない事に巻き込まれるだけだよ。あんただって命は惜しいだろ？」

つかの間、静けさの中で俺と彼女は睨み合う形になった。

そして、ほーりゅうはスカートを翻して扉に駆けていくと、そのまま消えていった。

「……得体の知れない不気味な人間の言う事って、妙な説得力あるわねえ」

夢乃の、ちよつと笑いを含んだような声がした。

「それ、どういう意味だよ」

「でも、確かに普通なら薄気味悪くて、もうあなたの周りには近づいて来ないでしょうね。結果オーライ？」

そう言っつて夢乃は笑った。

えんじえるず聖夜・8

チャプター・8 ほーりゅう

屋上からの階段を駆け下りながら、私は考えた。

確かに普通ならかわりたくないが、あの態度は何か人には言えない秘密を持っている。私の知りたい事かもしれない。近づくなと言われたら近づきたくなるというものよ。

「暴いてやる」

「ほーりゅう、こつちこつちー！」

とは言うものの、どこから手をつけようかと考えながら結局クラスに戻ってくると、お弁当を食べはじめていた女生徒二人が、手招きをして私を呼んだ。

「お手洗いにでも行って、帰り道迷っているのかと思っちゃったよ」
短いソバージュを揺らせて、人の良さそうな明子ちゃん^{あきこ}が言う。

一緒にいるのはショートヘアの紀子ちゃん^{のりこ}。お手製らしいサンドウィッチを食べている。

私は席に着きながら早速、情報収集と意思つつ聞いてみた。

「そこで委員長……ジプシーとすれ違ったけれど、結構もてるの？」

「？ ……全然そんな事ないけれど」

「なんで？ 廊下で女の子と喋ってた？」

二人の目が輝いた。どうやら二人共、この手の話が好きらしい。墓穴を掘って、自分が突っ込まれないように気をつけながら言うってみる。

「うーん、まあ、見た目も頭も良さそうだし。そうなのかなあっと
思ってた」

明子ちゃんが腕を組んで考える格好をした。

「そりゃあルックスは悪くないけれど、家業を継いで陰陽師ってい

う点で、何か怪しそうじゃない？ 実際本人もちょっと変わっているから、女子は必要以上に近寄らないな」

「そうそう、それでいて身体が弱くて体育もほとんど見学。やっぱり、ある程度はスポーツマンじゃないと」

手厳しい事を言う紀子ちゃんは、ちよつと声を落として続けた。

「それにジプシーって、両親がいないから普段は夢乃の家に同居だよ。なんか遠い親戚なんだって」

「夢乃の両親も一緒に住んでいるから、同棲にはならないんだよね」

同棲って何ようと、女の子二人はクスクス笑いあう……
ジプシーって結構複雑な過去でも持っているのかな。そして、さつき屋上で三人が集まっていたのを思い出して聞いてみる。

「城之内って、ジプシーと一緒にいたけれど、怖い人なんでしょ？」
「うん。私たちは怖いから近づかないけれど、あの二人は気が合うみたい」

「最初は素行の良くない城之内君を、委員長のジプシーが注意するって関係に見えたんだけど。なんて言ってもクラス内で変わっている者同士だから。確かに一緒にいる時が多いかな」

「でも、ほーりゅう、ウチのクラスって男子は結構ジャニーズ系多いと思わない？」

「そうそう！ 今度の文化祭、男子使って絶対舞台したいよね」

そのまま他愛ない話に移っていった。私は適当に相槌を打ちながら、クラスの情報って、まあこんなものだろうと思った。

やっぱりこれ以上の事を探るには、ジプシーの「今日の放課後のお出かけ」ってやつの後をつけるしかないかも。

えんじえるず聖夜・9

チャプター・9 ジプシー

委員会が終ると、予定通り五時過ぎだった。この高校は二学期の中間試験の終わった後に文化祭がある。今日の委員会は、その連絡がメインだった。……文化祭か。クラスの女子が何人か、舞台をやりたいと言っていたな。

この高校の文化祭の基本は、舞台と展示と模擬店。一学年十クラスで計三十クラス。一年が舞台をさせてもらえるかが、まず問題だな。

そんな事を考えながら、俺は京一郎と待ち合わせをしている体育館の倉庫へ向かう。しなくてはいけない事や考える事、沢山あつて忙しい。だから俺は今生きていられる。……なんていうマイナス思考になりかけて、慌てて意識を引き戻す。どんな簡単な事でも、気を抜けば成功しない。

今夜の計画一色に頭を切り替えて、俺は倉庫の扉をゆっくりと開いた。

チャプター・10 京一郎

俺は五時を告げる腕時計のアラームをとめると、大きく伸びをした。もうすぐ委員会が終ってジプシーが来る。あいつは時間に対して結構うるさい。

そして俺は、待っている間に今日の転入生の事を考える。ほーりゆうとか言うあの女。怖いもの知らずで言いたい事をいいやがって。明日も向こうから絡んでくるんだろつか。今日は余計な面倒を起こしたくなかったから無視したが、明日も寄って来たら、どうしてく

れようか……。

倉庫の扉が静かに開いたので、顔をあげる。

「悪い。遅くなった」

いつもの顔でジプシーが入ってくる。こいつは転入生の事は気にしていない様子だ。引つかかっているのは自分だけか。俺はジプシーの私服が入った鞆を渡した。

「さんきゅ」

そう言っただけでジプシーは、鞆を受け取りながら眼鏡を外す。そして俺に背を向けると、制服の上着を脱いだ。俺はジプシーの後姿を見ながら、こいつは躊躇なく俺に背中を見せる、と、ふと考える。

着替えの間に黙っているのも何だかなと思いつつ、俺はなんとなく思いつた事を口に出してみた。

「今回の相手になる連中ってよ、人数が多いけれど、なんか寄せ集めの感じがするよな。親父も言っていたけれど、最近急に大きくなった暴力団だしさ」

「さすが京ちゃん。俺もその辺の金で動くチンピラの寄せ集めだと思ってる」

「そんな仮契約つばいすぐ裏切りそうな奴ら、俺んちでは危なっかしくて使わねえけどな」

「いや、それなりに金さえ積んだら、これほど忠実になる部下はいないんじゃない？ 連中、自分の命にさえ危険が及ばなきゃさ」

そう言っただけでジプシーは上半身が裸になると、そのまま、鞆から出したホルスターを脇に下げた。そしてリボルバーを抜くと、すばやくシリンダーの中の弾丸チェックをして、グリップの底にあるイニシヤルの様な刻印を一瞥し、ホルスターに戻す。

俺はジプシーの、その一連の動作とその胸元で光っているロザリオを、いつもの如く不思議な気持ちで眺めていた。

えんじえるず聖夜・10

チャプター・11 京一郎

その上から黒いTシャツを着て、青いジーパンに着替えると、ジプシーは最後にジーンズジャンパーを羽織った。もともと童顔のせいか、ラフな私服に着替えると中学生に見えないこともない。

かがんで運動靴の紐を締めなおし、暗示をかけるかのように少し目を瞑った後、ジプシーは俺に向かって微笑みながら言った。

「今からさ、連中に捕まっている僕の大切な彼女を助けに行ってくるよ。」

その物言いに俺は呆れつつ、それでも手を振ってやる。

「へえへえ、どうぞ行つてらっしゃい。」

俺の見送りを後ろにジプシーが扉を開くと、目の前に立っていたほーりゆうが手をあげた。

「Hi！」

さすがに俺も、どうやらジプシーも予測をしていなかったようだ。珍しいジプシーの驚いた顔。夢乃に見せてやりたい。

「……何？ お前、後をつけられていたの？ ドジだね。」

思わずジプシーに言った俺に向かって、ほーりゆうは指をさしてきた。

「後をつけたのは京一郎。その後は隠れていたの。」

俺が昼寝も兼ねてここに来たのは三時間前。この女、その間ずっと待っていたのか。っていうか、いつから何処から俺をつけてきたんだ？

俺はジプシーの視線を感じたが、その目はきつと責めていない。失敗があってもフォローが出来れば問題がないというのがジプシーの信条だからだ。

「京一郎、頼む」

予想通り、そう言いながらジプシーは身を翻して、ほーりゅうの脇をすり抜ける。

「やーん、私も行く！」

そう叫んでジプシーの後を追いかけてようとしたほーりゅうの前へ、俺は立ち塞がった。

考えたら、朝からこいつは目障りだったんだ。ジプシーが出てしまえば、もう今回は俺のやる事はない。今後も俺達の周りをうるうるされないように釘を刺すには、今ここで、どうすればいいのか。

沈黙の中の殺気を感じ取ったか、ほーりゅうは真正面から俺を睨みつけた。

えんじえるず聖夜・11

チャプター・12 ジブシー

あの転入生、彼女の目的は何であれ、考えるのは明日からだ。それまでに京一郎がどうにかしてくれれば、それで問題は無い。

今夜の計画の為に今から神経を研ぎ澄ませつつ、俺は学校から続く長い坂道を一気に駆け下りる。そして、坂の下で立っている人物に気が付いた。

彼はじつと鋭くねめつけていた。その視線の先は俺だ。どうやら俺は彼に待ち伏せをされていたようだ。まあ当然だろう。彼はこの高校の生徒会長、今回の目的である足立真美の兄だからだ。

先ほどの委員会でも顔を合わせたけど、こちらはわざと視線を外し続けた。その前から、もしかしたら入学の時から言葉はなくとも、会長からは何かしらマークはされていたようだ。そして今回の事件で、ようやく俺と話をする気にもなったか。

時間は余りないが、高校内での陰陽師という噂をわざわざ肯定する必要もないと判断した俺は、特に術を使うことなく彼の前でゆっくりと立ち止まった。

口火を切ったのは会長の方だった。

「今から何処へ行く気だ」

俺は答えない。会長の出方次第だ。俺の沈黙をみて、会長は続けて言った。

「……妹が昨日の朝から戻って来ない。目撃者の話から誘拐された俺は考えている。貴様が真美とどうい関係かしらんが、その様子では行方を知っているんだろう？ 知っている限りを教えていたきたい」

噂では、かなりの妹思いだと聞く。妹が戻らなくて気が気ではないという事か。そして、ふと思い当たる。転入生が見かけたと言っていた屋上での人影は、なるほど、この会長の事だ。さて、どう答えようか。

「貴様、黙っては何もわからんだろう。答えろ」

「いやだ。あんたには関係ない」

相手の高飛車な言い方に思わず口から出た。挑発的な返答ではなく、もう少し考えれば良かったか。

そう思った瞬間、咄嗟にかがんだ俺の頭上をミリ単位で高廻蹴がかすめた。連続で放たれた鳩尾への足刀蹴は、引身をしながら飛び退ってかわす。こいつは生徒会長に選ばれるだけあって、文武両道に長けるとあった。確か空手の有段者だ。データ以上に実力がありそうで久し振りに楽しくなりそうな気配を感じたが、今回は仕方がない。

俺は、飛び退った反動を生かして踏み切ると、ガードレールを越した小道へバツク転で飛んだ。数メートルの高さからの着地でかなり衝撃があつたが、気にする程ではない。

追いかけて来られないと踏んで、俺は後ろを振り向かず全力で走った。

えんじえるず聖夜・12

チャプター・13 生徒会長

俺はガードレールへ駆け寄った。しかし、もう奴は追いつけない所まで走っていた。改めて、ガードレールに手を置き、急な斜面下の小道を見下ろす。優に、二階の窓から飛び降りる位の高さはあるだろう。果たして、躊躇無く後ろ向きで飛べる高さだろうか……。

学校内での奴の噂では、体力の無い軟弱な変わり者ではなかったか？ 話に聞くような怪しげな術を使われる前に二、三発で叩き伏せ、知っている事を白状させられると思ったのだが。

俺は、妹への手がかりに逃げられ、勢い込んでいただけに拍子抜けしてしまい、がっくりと膝をついた。

「きゃあ！ 見失っちゃう！」

その場にそぐわない声がして、俺はわれに返った。

顔を上げると、目の前のガードレールをまたいで乗り越えようとする少女がいた。この辺りでは見たことのないセーラー服姿だが、俺はシヨックのせいか頭が働かない。ぼんやりと眺めている俺の前で彼女はようやく乗り越えると、今度は急な斜面を滑り降りていった。

「あゝ！ 角、曲がっちゃった！」

待ってえ〜という声を聞きながら、彼女の姿が見えなくなる頃にようやく俺は、彼女は奴を追いかけたのだと気が付いた。

チャプター・14 京一郎

「ちょっと！ その年でもう木登りはないだろう。降りてこんか！」

高校の用務員のおっさんの声を聞きながら、俺はやられたと思った。あの女に油断した。まさか、ジプシーと同じような術を使うとは。

俺は女でも容赦はしない。面を張ってそれで怖がるならよしと、彼女に近寄って押さえ込もうとした時、目の前を痛くもない火花が散った。用務員のおっさんの声で意識が戻れば、もう木の上に飛ばされていたという訳だ。

最初からやけに怖いもの知らずで攻撃的だと思ったが、こんな技を隠し持っていたからか……。くそ！あの女に逃げられたどころか、時間稼ぎにさえもなっていないよ。

チャプター・15 夢乃

『昨日の朝、警察署に足立真美という中学生の少女が母親と共に訪れた。先日の遅くなった学校帰りに、怪しい人々の集まりを見たという内容だった。彼女は、はっきりと相手の顔を確認し、同時に自分の顔を見られたようなので不安を訴えに来たらしい。』

簡単な調書だけが作成され、その親子が警察を出た直後に警察内部で、麻薬取引が行われたという情報が確認された。彼女の訪れた部署が生活安全部だった為、事実確認が遅れたらしい。

急遽、刑事部組織犯罪対策本部・暴力団対策課と薬物銃器対策課の担当が彼女を追いかけた。だが、警察前で母親と別れ、学校に向かった彼女が何者かに連れ去られたという目撃と、その車を、とある暴力団組長の屋敷のそばで見かけたという情報だけが残った』

「これだけを聞くと、警察がその場でちゃんと確認しなかった為に起こった誘拐に思えるわね」

夢乃は倍率の大きい双眼鏡を靴から出しながら一人つぶやいた。警察が、事が公になる前に彼女を探し出して保護したいって気持ちには、単純にわかる。そして警察が下手に動けばすぐに不祥事としてマスコミに伝わる可能性があるのもわかる。

どこにも情報が漏れないように迅速に彼女を発見し保護。それが依頼された今回の目的。

昨日の夕方、父から話を聞いたジプシーは即座に引き受けた。そして頭の中で計画を練る為か、目を瞑り無言で一人腕を組んで思索し、京一郎に情報収集の電話をかけるよう夢乃に言った後、明け方まで外出していた。そして今夜でけりをつける気らしい。

私の手伝いは、今回はなしか……。あつては欲しくないけれど、

何か予想外のトラブルが起こったら、父にでも京一郎にでも連絡が
取れるように、せめて私は見ておこう。
そう思つて夢乃は、今夜の舞台を見通す事の出来るビルの屋上に来
た。

そろそろ、ジプシーが潜入する頃だろうか？

夢乃は双眼鏡を目に当てた。

「天体望遠鏡の方が良かったかしら？」

えんじえるず聖夜・14

チャプター・16 組長

「ちょっと失礼。様子を見てきますので」

屋敷の中で、何か騒がしさを感じた。組長は客人に断って部屋の外に出る。扉のすぐ外で待っていた者に声低く、だがドスの利いた声で「何事だ」と聞く。

「はあ、昨日連れてきた例の中学生の小娘と付き合っているらしいガキがですねえ、昨日から街で女の行方をうるさく聞きまわっております、また今日も同じそのガキを見かけたらしく、先ほど別の連中がそのガキを捕まえてきたようで」

めぐりの悪そうな部下に、ちよつといらつきながら言う。

「何も只の中学生に、そこまで神経質になる事もないだろう?」

「しかし、今騒がれたら何かの拍子と言う事もあるかと」

「今、大事な客人がみえているんだ。ばたばたしている所を見せるな。とりあえずガキも女の所に放り込んでおけ。そうだな……始末するとしても女一人よりも心中の方が始末しやすいか」

頼りなさそうな部下に指示を出し部屋に戻ると、三人の屈強そうな男達を従え、ソファにゆったりと腰をかけていた老人が声をかける。

「何かありましたかな?」

穏やかに微笑んでいるが眼光は鋭く、黙っていても威圧感を感じる。この世界でのし上がるには、今後この老人の後ろ盾がなければならぬ。組長は取り繕うように愛想笑いをしながら言った。

「いえ、昨日捕まえた中学生の娘がおります」

「ほう、……中学生の娘か」

老人の目が変化し、好色そうに光る。その変化を目ざとく見逃さ

なかった組長は言葉を続ける。

「どうです？ 捕らえている部屋には監視カメラも設置しておりま
すし、ちよつとどんな娘かお見せできますが」

いかにも興味を持ったように、老人は杖に重心を乗せて立ち上が
る。

「最近の若い者とは、あまり話をしないもんでなあ。是非会つても
みたいものだ」

老人を案内しながら、思わぬ所で機嫌をとれそうだと組長は胸の
中でほくそえんだ。

チャプター・17 ジプシー

「中学生同士でも付き合っていたら、いろいろ話もあるだろう？
少ない時間だ。有効に使えよ」

そう言つて、俺を力任せに部屋の中へ突き飛ばした男達は、薄ら
笑いを浮かべて鍵をかけた。しりもちをついた俺は、思いつきりわ
ざとらしく叫んでやった。

「何だよ、ここは！ 冗談だろ？ 出せよ！」

その間に男達の足音が遠ざかり、地上へ続く階段を通り過ぎて消
えていった。その時になつて、ようやく辺りを見渡す。ドアにもど
の壁にも窓がない地下室。今は何も置いていないが普通なら物置と
して使われそうな埃っぽい部屋。薄暗い裸電球。手の届かないとこ
ろに1箇所だけに設置された監視カメラ。そして、部屋の片隅で俯
いて膝を抱えて座っている女の子。お嬢様学校と呼ばれている、ち
よつと離れた所にある女子中学の制服を着ている。腰まであるウェ
ーブのゆるくかかった髪。

髪が微かに揺れた。彼女が少し顔を起こして俺を見たようだ。つ
ぶやくような声。

「……誰。……私、貴方なんか知らないわ。」

俺は立ち上がりながら服に付いた埃を払う。そして彼女の方に近

づいて行った。ゆっくりと彼女のそばにかがむ。連中は読唇術など知らないと思うが、監視カメラからは口元が見えない角度で彼女の耳元に唇を寄せ、ささやいた。

「でしょうね。貴女とは初対面ですよ」

監視カメラにはどう映っているのか。再会出来た恋人同士の抱擁でも見せるべきか。……まあ、連中にそこまでサービスする事もないか。

今、目の前にいる彼女は、写真で確認済みの少女だった。そして俺を見つめる彼女の目で、やつれてはいるが、その清纯さがまだ失われていない事がわかる。間に合った。話を聞いてから急いだ甲斐がある。

まだ状況を把握していない顔の彼女に、監視カメラからは口元が見えない角度を保ちつつ、小さな声でささやき続ける。

「見た目が中学生だと身体検査もないな。こっちは一応警戒しながら捕まってるのに」

こちらの小声につられたか衰弱のせいか、彼女は小さな声で言った。

「あなた、本当に誰？何を言っているの？」

ここで騒がれたり、説得や説明の時間を長くは取りたくない。まあ、少し違うけれども理解しやすいようにと、俺は簡潔に言った。

「警察の者です。足立真美さん、貴女を救出・保護しに来ました」
放心した顔で警察とつぶやく彼女に、続けてささやく。

「忍び込んで貴女を捜しても良かったのですが、敵の陣地内で長く時間をかけたくなかったものですから。わざと貴女の恋人と触れ込み捕まれば、真っ直ぐ貴女の所へ案内してもらえらると思いましたが、申し訳ありません」

状況がわかってきたのか俺の袖を引っ張り、彼女は小声で、だが生気の戻った声で言った。

「助かるの？」

俺は着ていたジーンズジャンパーを脱ぎ、彼女の頭から被せつつ、ついでにこちらはサーブिसでウインクしながら答えた。

「今から脱出します。この後の警察でのいろいろな証言、よろしく」俺は彼女が力強く頷くのを確認した。この様子なら、行けるか。

「この上着、重いけれども防弾チョッキ仕込んでいるから、頭から被っていてももらえるかな。で、両手で耳を塞いで壁際に下がっていい」

彼女は素直に言われた通り、壁際に寄って耳を両手で覆った。

ここから脱出までは時間をかけられない。俺は監視カメラを気にせず、逆に見せつけるようにシャツの下からすばやくリボルバーを抜くと、ドアの鍵を二発、蝶番もそれぞれ撃ち抜いた。部屋の中を轟音が響き渡る。直後に俺は彼女の手を引き、ドアを蹴り倒して走り出した。

チャプター・19 組長

ちょうど監視カメラの映像をみる部屋の前に到着し、組長が扉を開けようとした所へ、中から扉が勢いよく開いた。慌てて飛び出そうとした部下の一人とぶつかりそうになり、組長は怒鳴る。

「客人の前でなんだ！」

「すみません！ 失礼しました！」

すぐに続けて報告する。

「今つかがおうと思っていたのですが、例の中学生が逃げ出しました」

「何？ ちゃんと鍵をかけていなかったのか」

「それが……男の方が拳銃を持っておりまして」

「何だと？ 最近のガキは……誰かがうっかり取られたのか？ それともエアガンを改造でもして」

急に組長の顔の前へ、話を遮るように杖が振り上げられた。驚いた組長と部下の注意が、杖を振り上げた老人に向く。老人は皆の視線を集めた事を確認したように杖を下ろし、部下の男に向かって、ゆっくりと口を開いた。

「どんな中学生……男かな？」

「はい、でも顔がはつきりとは……。監視カメラでみた限りでは、こちらの誰かから奪った拳銃ではなくて持参した型の拳銃のようであと、わかる特徴は、首から十字架のネックレスを下げています」

老人の顔色が変わった。その表情のひとつは確信。さらに、そこに混ざっている表情は驚愕か恐怖か。そして組長に向かってきつぱりと言った。

「これからの取引、いや、これまでのお付き合いも無かった事にさせて頂こうかな」

「何？」

急な言葉に、組長は慌てた。

「どう言う事ですか？ 一体何が理由で」

老人は、後からついて来ていたボディガードの男達に帰りの車の指示を出しつつ、杖を持ち直した。そして、組長に対して言葉を続けた。

「わしは素人と付き合うほど、まだまだこの世界では困ってはいないのだよ。ジプシーの噂もご存じないとはなあ」

「……ジプシーだと」

老人は一寸考えたが、置き土産とでもいうように続けた。

「まあ、どんな相手か位は知っておった方がよいか。……見た目は幼いが実際の年齢は誰も知らず、警察が動けない時や最後の決め手を欲しがっている時、公の法律を無視して動いている男じゃな。ジプシーの目印は、いつも身に付けているロザリオと愛用の357マグナム……」

廊下を歩み去っていく後姿を見送りながら、組長はつぶやくように言った。

「それは、そういう奴がここに来た事で、この組織が時間の問題だと言う知らせか。警察に目をつけられていると言う証拠か」

老人の姿が疾うに見えなくなり、その成り行きを不安そうに見ていた数人の部下の視線にふと気が付くと、組長は響き渡るような声で彼らに怒鳴った。

「奴を逃がすな！ 必ず捕まえる！ この屋敷は正面の門以外は高い壁で囲まれている。逃げ道はないはずだ。絶対に仕留めろ！」

頭の中には、この屋敷の見取り図や監視カメラの位置、出入りしている連中の数などが全て入っている。俺はその情報を元に、もっとも危険の少ない廊下を通り部屋の前を横切り、出来るだけ脱出の為の最短の道を選ぶ。そしてポリシーとして無益な殺生は望まない。出会う連中をぎりぎり接近戦に持ち込み、銃で撃たずに素手で倒していった。俺は自分が小柄だと自覚している。だから本当は素手の格闘には向かないのだろうが、自分と相手の体重や反動を利用し技を全力で駆使していく。しかし、いい加減その人数の多さに、つい溜息と言葉が出た。

「なんか、質より量って感じだな」

後ろから一生懸命ついて来ていた少女が心配そうに言う。

「……今の人、あんなに思い切り殴って大丈夫ですか？」

「確実に一撃で倒していかないと、こっちがやられる」

言い方、語尾が少々きつかったかなと思い、俺は慌ててちょっと彼女に笑いかけてみる。そして、なんだ、まだ俺、笑う余裕があるじゃないかって気になってきた。

襲ってくる連中が途切れ、壁一枚で屋敷の庭に出られる段階になつて、俺は近くの部屋へ滑り込んだ。普段は使われていないような何も置いていない殺風景な部屋。電気をつけずに内側から鍵をかける。

「今から庭に出て、闇に乗じて正面から出ようと思う」

「え？ 庭つて、でも外灯が立っているし、窓から家の明かりももれているし。闇に乗じて……」

不安そうに口ごもる彼女に、まあ見てなという感じで目で頷いな

がら、リボルバーをホルスターに戻す。

俺は両手で印契を結んだ。口の中で小さく一連の真言を唱える…。

両手の平を開き地面につけた。

同時に屋敷を取り囲む壁の四隅で、昨日の晩に外から仕掛けておいた梵字が光る。

四角く区切られた空間が地下深く沈むような感覚を生じ、俺は結界の発動を確信する。そして、この空間は術者の俺が、やられるか結界の外に出るまで続くはずだ。

「あ……」

屋敷も外灯も一斉に明かりが落ち、彼女が小さな声を上げた。

「大丈夫、俺が仕掛けた。だから俺達が出るまで暗闇の状態だ」

俺は詳しい事を説明してもわからないだろうと思い、彼女にそれだけ言つて部屋の窓を静かに開けると外を見渡した。ドーベルマンの類がない事は事前に確認済みだ。俺は先に窓の外へ出ると、周囲の気配を探る。大丈夫だ。時間の問題だろうが、まだ屋敷の中以上の数は外に出てきていない。この暗闇の中、気配と殺気だけで連中をかわして表門を突破する自信はある。

「今なら表門までこのまま行けそうだ」

そう言いながら彼女に手をかして、窓を乗り越えさせる。

「広い庭だから離れないようについてきて。大丈夫。こんなことは俺にとっては日常茶飯事なんだから」

「ふう〜ん」

言い訳ではないが、多分目の前にいる彼女と同じ位、殺気がなかったからだ。

まさかと思いつながら振り向いた背後に、ほーりゆうを見た俺は、比喩ではなく本当に頭を抱え、がっくりと脱力した。

チャプター・21 ジブシー

脱力した俺と足立真美を見比べながら、てへっと、ほーりゅうは照れ笑いを浮かべた。

「……なんで」

この状況で俺は頭を抱えたまま、なんと言えばよいのやら、言葉を捜す。

「……なんで、お前がここにいるんだ」

「後つけただけじゃない。ケチ」

「……」

「その後、この庭で迷ってた」

「……状況を見極める。馬鹿野郎」

「私に状況なんかわかる訳ないでしょ」

「……だったら後をつけるような真似をするなよな」

「私に隠し事するからよ」

「……今日初対面の人間に言えるか」

「その初対面に失礼な事は言うクセに」

「何！ だいたいお前は」

「ちよっと、それより逃げなくていいの？」

ほーりゅうが俺の言葉を遮って言う。俺は舌打ちをしながら考えた。まさか置いていく訳にはいかない。それにこいつは俺の素性を知っている。

「言われなくても行く。……ったく、足手まといの役立たずが増えやがって」

ほーりゅうは、むっとしたようだ。すぐに言い返してきた。

「そりゃあ、ここでは迷ったけれど、今すぐ役に立ってあげるわよ」

「出来もしねえ事言うな。さっさとついて来い」

「やん。少しの間、待つてくれてもいいじゃない」

「いい加減にしろ！ 本当に状況がわかってるのか、能天気女」
「融通の利かない男ね！ 私がここで出口を作つてやるうって言うてんのに」

「この分厚い壁でもぶち抜く気か？」

言い争いの時間が長すぎる。これだけ同じ場所に留まっついていて、連中に見つかからない訳がない。俺は仕方なく、言う事を聞かないほーりゅうの意識を失わせ、担いで走る位の覚悟を決める。全く、こいつといると調子と予定が狂う。

俺の表情で、多分考えがわかったのだろう。ほーりゅうが一步下がって身構える。俺は一步踏み出した。

その時、異様な空気を感じた。場に違和感を感じたと言うべきか。一瞬、何処かで一度同じような感覚を体験したという記憶が蘇る。そしてそれがいつだったか思い出す前に、俺の本能が身体を反応させた。

俺は後ろに下がりながら足立真美を背後に庇いつつ、ほーりゅうと俺の間の目の高さの空間に、左手ですばやく五芒星を描き、両手で印契を結んだ。普段あまり使ったことがない簡易防御結界。急な為に結界強度の確認が出来ないまま術を発動させる。

と同時に俺は、ほーりゅうの胸の前に集まりつつある光の玉が輝くのを見た。

ほーりゅうの集まった力が、だが俺に向かわずに横の壁へと放たれたのを防御結界越しに見た。爆発音が周囲に響き渡り、爆風が一瞬吹き荒れる。

半ば啞然としながらも俺は印契をほどくと、簡単な結界はたちまち消えた。砂塵の舞う場に静寂が戻るが、今の音で連中はここにすぐ集まってくるだろう。

そして、ほーりゅうはと見ると、破壊された壁の瓦礫を踏みながら、俺を振り返って言った。

「ほら、これ位の穴が開きや通れるでしょ？ こつちからの方が絶対早いつて。さあ、さっさと逃げるわよ」

あまりの手荒さで言葉のない俺に、ほーりゅうは勝ち誇ったように言う。

「何よお。あんたが役に立てって言ったからじゃない」
まあ確かに、逃げ出すのに早いに越した事はない。

お言葉に甘えて無言ながらも、ほーりゅうの後から俺と足立真美は穴をくぐった。

そして、そのまま意気揚々と歩き出そうとしたほーりゅうに、ふと気が付いて俺は尋ねた。

「おい、今日初めてうちの学校に来た転入生！ この辺りの地理はわかっているのか？」

振り向いたほーりゅうは、当然のように言った。

「全っ然」

……だと思ったよ。こいつ、何処に向かう気だったのか。

「俺が先に行く。お前は後からついて来い」

そう言う俺は有無を言わず、彼女達がついてこられるだろう

速さで走り出した。

息を切らせて追いついたほーりゅうは、俺が自動切符売り場で電車の切符を買うのを見て、驚いたように文句を言った。

「何で！ 何で逃走に車とか使わないのよ！ 用意悪いんじゃない！？」

「何を言う警沢者。高校生が車なぞ使えるか。交通機関の熟知で、これほど便利な逃走手段はない」

「そうかあ〜！？」

納得していなさそうな顔のほーりゅう。

「連中もまさか、俺が電車で帰るとは思っていないだろう」

「でもさあ！」

まだ何か言いたげなほーりゅうと足立真美を連れ、俺は改札を通る。

連中にも予想外の脱出方法だったのだろう。現在追っ手はかかっていない。こうやって実際に人ごみの中に紛れると、すぐに只の中の学生三人組を探し出す事は難しいはずだ。ほーりゅうはまだ何かぶつぶつと文句を言っていたが、特に何事も無く三人とも電車に揺られた。

降りた先の改札の出口で、顔見知りの刑事が数人の警官を連れ、俺に手を振っていた。

「お嬢さんの方から、だいたいの到着時間の連絡がありました、迎えに来ました」

何処かで様子を見ていたのだろう。相変わらず夢乃は手回しが良い。

俺は足立真美に向き合つと、小さな声で言った。

「警察側は当然了解済みだけれど、家族にも誰にも俺の存在は言わないと約束してもらえるかな」

彼女は、ちょっと戸惑ったように俺を見た。

「頼むよ」

手を合わせる格好をしてみせる。彼女は微笑んで言った。

「わかりました。助けてくれてありがとうございます……」

覆面パトカーへ足立真美を連れて行こうとした刑事が、その時初めてほりゆうに目を留めた。

「……君は？」

ほりゆうが胸を張ってきっぱりと言った。

「私は協力者よ。今回の成功の鍵は私なんだから」

……この方向音痴女、このままここに置き去りにしてやるのか。

チャプター・23 ジブシー

成り行き上俺は、ほーりゆうを家まで送り届ける事になる。まあ、聞きたい事もあるし、おそらく彼女も俺に何か用があるに違いない。前を歩く俺の後を付いてきながら、ほーりゆうが先に聞いてきた。「……あんた、警察官？」

「いや」

当然それだけの返事では納得できないだろうと思い、ちよつと考えて続けた。

「俺はただの高校生だけれども、警察の手助けをするだけの力がある。あとは、……クラスの誰かにはもう聞いているんだろ？俺は夢乃の親父さんにも世話になっっているし」

どこまで納得したのかどうか頷きながら、ほーりゆうは言う。

「だから拳銃持って乱闘して、他人の家を壊しても警察が揉み消してくれるんだ」

「あの壁を壊したのはお前だろ？」

「あ、……そうでした」

「俺は今回招待された形である家に行った。誰かさんの不法侵入とは違う。閉じ込められていたドア以外に壊した物はないし、人も殺していない。今回警察に迷惑はかけるような事は何もしていないさ」

そこまで話をした時、公園の前を通りかかったので、俺は中に入ってしまった。ちよつと戸惑ったようだが、ほーりゆうも後について来た。ブランコと鉄棒しかない小さな公園だった。ベンチも見当たらなかった。俺は指差して、ほーりゆうをブランコに座らせる。

「さて」

俺は、ブランコの柱に寄りかかりながら言った。

「あんたの執念には脱帽するよ。答えられる限り教えてやる。俺に何の用だ」

しばらく、ほーりゆうはどう切り出そうか考えているようだ。そして、おもむろに首の後ろに両手を回すと、留め金を外してネックレスを外した。

そのまま無言で俺に手渡してくる。

受け取った俺は驚いた。

「俺と同じロザリオ……？」

俺は自分のロザリオを引っ張り出し、見比べてみる。

「重さも形も材質も、ほぼ同じだな。……違うのは中の石の色だけか」

ほーりゆうが言った。

「あんたが同じ物をしているのを偶然見たの。私が日本に残ったのは、そのロザリオの秘密を知りたいから。……あんたのそれ、何処で手に入れたの？」

思わず、俺は無防備に答える。

「俺の物は、母親から形見で貰ったものだ」

「くれる時、お母さん何か言っていなかった?!」

勢い込んで、ほーりゆうは聞いてきた。

「……普通、形見って亡くなった後に貰わねえ？」

「あ。そっか、ごめん」

ほーりゆうは何かテンパっている、ぎりぎりの状態なのだろうか。黙り込んだほーりゆうを見ながら、とりあえず俺は以前に母親から聞かされた話があるか、うる覚えながら考えてみる。

「……は、緑色をした本物の石が入るのよ。ヴェナスカの、カディアって名前の不思議な力を持つ石。石それぞれに4つの属性があって……確か、五芒星・聖杯・杖・剣。でも、その石は一族にしか伝わらない。このロザリオを作った時、私はイミテーションってわか

っているから色違いで中の石を青色にしたの』

確か、話し始めはそんな感じだった。当時六歳だった俺は理解できない言葉が多くて聞き流した。今ではある程度、内容自体は理解出来ている。

だが急に今、ほーりゆうに知っている全てを告げるには、俺の気持ちの整理が出来ていない。何故なら、それを語るには外せない、俺がこの世で最も憎むべき相手の事も話さなければならなくなるからだ。

「悪い、特に思い出せない」

そう言いながらロザリオを返す。俺の言葉に、ほーりゆうは明らかに落胆したような顔をした。

だが、恐らくこのロザリオに関する秘密の糸口は、俺からしか見つけ出せないだろう。……奴との接触さえなければの話だが。

全て教えると言ったのに実際は知っている事を隠している後ろめたさもあり、俺からの告白に時間がかかってもいいのならと考え、俺は続けて言った。

「……そのうちロザリオについて何か思い出すかもしれない。それまで待つていてくれるなら、まあ、どうせ同じクラスだし、周りを邪魔にならない程度にならうろついても」

「本当！？　ありがと！　思い出せるように手伝うよ！」

顔をぱつと綻ばせ、とても嬉しそうに言ったほーりゆうに一抹の不安を感じたのは、俺の気のせいだろうか。

えんじえるず聖夜・21(完)

チャプター・24(最終章)ジプシー

見上げると、綺麗な星空が出ていた。あれは……みずがめ座か。そばには、うお座。アンドロメダやカシオペアもはっきり見える。急にほーりゅうが静かになったので、俺は何となくぼんやりと眺めていた。星座の知識は全て詰め込んでいるが、こつやって星空をゆつくりと眺めるのは久しぶりだ。

ほーりゅうも、黙ってしばらくブランコを揺らしていた。だが、思い切ったように今度は彼女の方から話し始めた。

「……今日、私の不思議な能力、見たでしょ？」

「いや、その件に関しては明日学校で聞く」

俺がすぐに話をさえぎったので、勢い込んでいたほーりゅうは訝しげに俺を見た。俺は続けて言う。

「お前がここにいるって事は、京一郎はお前のその力をくらったって事だろう？ 明日、京一郎と一緒に聞くよ。お前だって二度も同じ説明をしたくないだろう？」

なるほど彼女は言った。

俺は、もたれかかっていた柱から身体を起こした。

「家まで送るよ。どこら辺？」

「で、どういう事かしら」

次の日の朝早く、申し合わせたかのように昨日の面子が校舎の屋上に集まった。そこで俺は、のんきに手すり越しに眼下の風景を眺めていた。眼鏡を外して拭いてみたりもする。

そして、ほーりゅうに詰め寄っているのは、夢乃と京一郎だった。「私達にも良くわかる説明、してもらいたいんだけど」

ほーりゅうはくるくる回りながら言った。

「ほら！ この学校の、おニユーの制服が昨日届いていたんだあ」
「ごまかさないで！」

「うーん、なんと言いますか……」
いざ白昼で説明となると、気分的に何だか難しいらしい。ほーりゆうは困っているようだった。昨日から散々彼女に翻弄されてきたんだ。たまには困れ。

しかし、あまり長引くと朝の授業に遅れる。やむを得ず俺が代わりに言っただけ。まあ、ロザリオの力が、本人自身の力かは別にして。

「一言で言えば、超能力だそうだ」

「……嘘？」

当然ながら、夢乃も京一郎も疑いの眼差しだ。なので、続けて俺が説明した。

「俺自身が陰陽師としての事もあるが、術にしる超能力にしる魔法にしる、根本はそう変わりやしないと思う。……実際、超能力と言われる力を持っている奴、俺は一人知っているし」

近くで普段から俺の陰陽師としての力を見ている二人だ。簡単に了解はするだろう。事実、夢乃はもう受け入れている顔をした。そして、京一郎をひじで小突きながら言う。

「良かったわね。女の子に喧嘩で負けたんじゃないよ」
「うるせえな！」

「でさ、私もあんた達の仲間に加えてよ。絶対役に立つと思うんだ」
ほーりゆうは真面目に俺に向かって言った。そう言えば、昨日そばをうろついてもいいと、確かに言ってしまった。だが、牽制がてら言ってみる。

「わかっているのか？ 好んで自ら危険な目に合うこともないだろ？」

「わかってる。……私ってば、前の学校では能力を隠してきたのよね。でも、持っている能力を隠したままってのも、不自然だとも思

った訳よ」

「なに、才能を埋没させたままってのが勿体ないって考え？」

京一郎の言葉に、ほーりゅうは嬉々として言った。

「そう！ 私は自分の身は自分で守れるし、あんた達の悪運が強けりや強いほど、絶対に損はさせない」

なんか俺には、引つかかる言い方に聞こえたが。

急に京一郎が思いついたように言った。

「そうだ。今ここで、超能力使ってみせてみるよ。俺をふっ飛ばしたようなヤツ。それで昨日の件はチャラにしてやるよ」

「あ、私も見たいかも……」

二人に見つめられたほーりゅうは、照れ笑いをしながら後ずさりつつ、つぶやくように言った。

「私……ぶつつん切れたり切羽詰らないと、超能力出ないのよねえ

……また、夢遊病の如く無意識に出たりして制御できないの」

沈黙。

「なんじゃそりゃあ！ いざという時、役に立たねえじゃねえかあ
！！」

予鈴と共に、屋上で叫びがこだました。

えんじえるず聖夜・21（完）（後書き）

ご愛読、ありがとうございました。

続編「最終舞台は華やかに」を、お楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9589c/>

えんじえるず聖夜

2010年10月8日14時52分発行